

「日本史」学習についての三つの断章

— 43 年度高教研日本史部会から —

稲葉克夫

〈その一〉

青森県の高校「日本史」における

地方史学習について

一

青森県高等学校教育課程研究会「日本史」部会では、昭和三十九年度から地方史学習の効果的であり方を意図的・継続的に探究してきた。最初、地方史学習が授業上正統的位置を占めえない原因として次のような項目があげられた。

ア、学習指導要領でその位置づけがはっきりしない。
イ、あまり義務的でない。

イ、教科書の内容の指導で手一ぱいである。

ウ、地方史に標準的テキストがない。

エ、大学入試に直接役立たない。高校入試にも県内の

地理的向題は出題されても地方史的向題は出題されない。

オ、生徒の能力、興味、必要性との関連が明確でない。

カ、中央史に地方史をもちこむ力を現場教師が持ちあ
わせない。

キ、地方史研修の機会、機軸がない。

しかし、これらの向題点を解決する努力が年々積み重ねられ、まず地方史に関心、必要性を持たない教師がなくなり、導入段階に用いて生徒の興味をよびおこした成功例、地方史の学習時間を固定化しないで専断的に学習に用いた実践例などの段階から、年間指導計画の中に体系的に組みこんだ実践例まで凹凸はあるが課題の試行がなされた。

青森県における地方史学習の必要性の才一点は、青森県は日本史の表舞台に登場することは少ないし、出て中央史に対して貢の価値をもっている場合が多いので、地方的無力感、疎外感を排除することにあるのであつて、大にしては民族意識、小にしてはより良き郷土を築こうとする意欲を高める必要性があるからである。

この点、全体的な傾向として、意識的にせよ、無意識的にせよ、考古学学習に異常な力が集中されているのは、県出土の龜ヶ岡式土器や尾川考古館が学術史上、世界的レベルにあるということへの誇りのあらわれとみられる。本県のように小、中学生から老人に至るまで土器、石器類に関心を強くもっている例は他に余り類をみなからう。考古学の宝庫といわれるように分佈範囲が全県的で、出土品も多量な関係であるからだが、反面出土品に接するに余りに日常感覚的になつてしまうと文化賊意識が薄れる。その点、県下各校、各教師の文化賊保護精神の指導は徹底しているが、なお地方全体の意識の向上には力が足りない現状である。また、出土品の学校における管理方法にも改善を要する点がある。この分野では、興味、鑑賞力、発掘の体験、復元技術など教師の指導力にきわ立った差異もあるので指導上、充分の注意が必要であり、生徒の具体的質問や持参の土器・石器類への判定も慎重

さを要する。

地方史を学習することの効果の才二点は身近互所に教材を求めることによつて学習意欲をおこさせることである。各種の遺跡、遺物、遺構、伝統的文化財、民族、伝承などが利用されるが、それが個別的解説に終つてしまつては効果的でない。この点において青森県の場合、考古学の分野を除いてまだ学術的専攻りを与えられていないので多くは望めないが、それだけに各種資料の取扱いが古い郷土史的レベルにとどまつたり、逆に非証史的に現代的な解釈に走つたりすることに注意しなければならぬ。

また地方史料はいつまでも導入的段階にあるべきものではなく、それを利用してさらに学習の内容の具体化、深化、構造化に努むべきである。この点、比較的県下でよく活用されているのは戦国大名の形成や徳川幕藩体制と津軽藩の関係である。下剋上、領国統一過程・検地、新田開発・体制の動搖・農村の解体など政治、経済、社会的角度から考察される。しかし奥南（南部）地方、つまり旧盛岡藩、八戸藩、七戸藩、斗南藩に支配されていた地方の場合、その地域の正史そのものが未開拓であり、史料の入手も困難なため、結局津地区とアンバランスになつている。

社寺や建築などの文化財も城下町以外は教少く、県下全般的に美術工芸的な面は手薄である。しかし都市化し

た地方では消滅した各種の風俗習慣、民芸品・年中行事などの伝統的有形無形文化財が多く残っており、それを収める目ざねあれば相應に文化史学習が行なえる。したがって教室学習の展開、継続化、実働化はこれらの事象を正しい視座でみる正史認識の態度の養成とあいまわっている。生徒の学習態度の能動化、積極化、自発性ほどの教材にも重要であるが、地方史を活用することはその態度を養成し、生徒と家庭、地域との交流を深めて効果的である。青森県にありては単なる伝説とされている、坪の石碓、観光資源化された数々の、義経伝説、北条時頼の、国國伝説、アイヌ語地名、など、指導方法によっては生徒の関心を多方面に展開させる材料が多く感ぜられている。この点、これまでの教室授業は無策であった。しかし、反面無理に木に竹を紐いだような、不消化であり、飛躍しすぎた結論を急いではならない。身近な地域のものばかりというて、必ずしも生徒の理解が早いとか、関心が強まるとはいえない。教科書の史料で充分なのに地方史料を使ったため理解が混乱したり、また特異な授業にしようとして、シヨッキンクホな飢饉、一揆、天変地異、その他地方的特異例ばかりあけて、過去の惨めばかり一面的に感じさせることや、正史的制限を越えて精神講話的な結論にたらないように考慮が必要である。地方史料は常に精選されねばならず、使用するには必須条件をもつもの、より学習効果を大なりしめるものでなけ

れはならない。

先人の努力については善名な例、三本木原の新渡戸文子、三沢の広沢安住などが地元でとりえられているが、三十分や一時向ぐらいの融れ方だと、小、中学校で劇化などして学んだ方がより詳細、感動的だったということもありうる。したがって高技段階にはそれにふさわしい内容、取り扱い方の工夫が必要である。また彼らはその一地区の局部的人間ではない。このいう点、県下の各教師がもつと広く目をむけなければならぬ。いまだに津軽と南部、さらには会津藩ほど旧藩意識がその人物をとりあげる時の目じるしになっているのは早く打破し厚けられなければならない。

史料の取りあけ方の不均衡については多少融れたが、時代的、ジャンル別不均衡も大きい。教授資料が考古学分野と幕藩期に偏しており、特に近代は皆無に近い。青森県は明治時代、米の反収は全国でビリから三位であったのが現在トップを争いをしているという発展の足どりが教室内での日本近代史の歩みと重ねられていない。大體において近代の取り扱いが駆け足になるきらいがあるから、まして地方史がなおざりにされることは当然考えられる。しかし正史の本当の血肉は近代百年にあると考えられる。この点、年間授業全体の計画や教師の正史意識に向題があろう。またジャンル別では、政治・経済にかたよって文化史的資料が手薄である。地元の有形無形

の文化戯のほか、記録作品―菅江真澄の遊覧雜記や古川
由松軒の東遊雜記など基本的な文献の活用が望まれる。
日本三大美林といわれるヒバ用材、鹿角の鉱産物、西回
り海運と蝦夷交流なども争が触れられてなく、津輕地区
の板碑のような専門的といえるほどに深く学ばれている
例もないわけではないが、時間的、経済的制約のため、地
理学習のフィールドワーク的にはいっていない。その他、
資料の偏在ということもあるから広範囲から調査してい
る生徒の活用が大切である。

地方史を教科書中心の教授授業において体系的に取り
扱えるかという問題があつて、それを不可能視する見解
が多かつた。しかし最近、その体系化が可能という実証
例も出て来た。史料の精査という時に青森県には一等史
料たるものがないとされていたが、鎌倉幕府の得宗頼朝
題、安藤昌益研究、それに明治のナシヨナリズム、昭和
のファッショ体制と青森県のかかり具合、さらに地方
主義文化、講談社文化など受け身の形でなく、ポジティ
ブに日本の歴史に参加していった先人の姿を辿ることは
優に一等の価値を有するといえよう。

中央の出版物からだけ知識を得ようという姿勢では、
当然中央の感覚に追隨した形でしか地方史をとらえられ
ない。郷土の身近な資料に学習体係の中で正統的地位を
得させるには、教師自らがその資料を洗ひ清め、その価
値を決定しなければならぬ。この作業は「公教育―学

習指導要領の拘束というワケの問題とかり改、各々と困
難点に突き当たるものであるが、こつこつ教師自身の苦
闘が日々教室に生命を与えるのである。

なお郷土学習、地方史料の活用がよくなされているのが、
実業高校や医学中心でない高校であり、実業高校でも特
に自習者養成たる農業高校の生徒に意欲がさかんで、他
郷へ就職しようという生徒の関心は薄い。この問題は単
に日本史の授業上の問題であるばかりでなく高校教育全
体にかかわることであろう。工業社会に変貌した日本に
おける地方のあり方、長く日本人と精神構造を支配した
農本主義的価値観の崩壊、生徒の心より所、高等産業
社会の教育目標など学校教育全体の場での問題と考える。

三

教科書はいつならば中央の支配権力の営む社会体制、
政治機構、文化所産中心である。しかしそれらはあくま
でも地方との相商の上に成立しているのだから演繹的に
も地方史を活用することは重要である。かかる意味で地
方史は体系的であつてほしい。

もちろん地方史には地方感情や狭い旧藩意識が残つて
おり、部分的であつたり、史実や科学的認識にあわたり
伝承も多い。伝播過程において変質したものもある。し
かし地方にあつたがゆえに本質的形態を残したものも多

い。したがって広く補助科学の方法論を用い、科学的吟味に耐えうるものに再構成して教材化しなければならぬ。

また授業においては無理なけん強附会や評価を避け、いたずらに敷衍になることも自戒すべきで、日本史学習全体の中での適切な位置づけを常に考慮し、地域の発展、モラル高揚、愛郷心をどうか要素たりうることに努め、われわれの文祖の歩みが日本の歴史を創りあげたのだという自覚と誇り、そして今後への責務を生徒が持つべき授業としなければならぬ。

(昭和四十三年度高等学校教員課程書森眞集会研究成果要旨から)

へつこの二

日本史における主題学習について

最近の高校における歴史教育について、文部省の教科調査官平田壽三氏が一つの報告を出している。(『高校教育』44・2)。大学教育で考えたこと——とくに高校の歴史教育について——それは平田氏が教えている大学主に、彼らの中学高校時代の歴史教育をレポートさせたのであるが、答えは平田氏の予想通りであり、高校の歴史教育はこれでもいいのかと訴える声が多かったという。そしてジマーナリステックに取り扱われる傾向性はみられず、彼らの考えはむしろ平田氏の学生時代の一般学生

よりも保守的で、彼らは大学に入学するまでは文字通り入試一辺倒で、余りに思想や政治に無関心であったと嘆いていた。

平田氏が予想していたのは、悪しき意味での近代主義、合理主義、実利主義の過剰からくる問題点であるが、それを生徒は予備校的学習や大学入試問題の批判、教師の歴史する心、価値意識の低下、工夫、技術の怠慢、生徒の意欲のなさ、等々として批判攻撃していた。彼らが歴史教育に求めているのは、歴史学習を通して人間の根本問題を考える指針にしたいとか、必ずしも研究意欲を燃やしたいとか、人間学の立場を歴史学習の上でもとりたいとか言い、教師に期待し、尊敬し、また抵抗し、軽蔑する。

現代社会の変質によつて若者のモラル、意識は変化し、学校環境も変容しているが、平田氏は二十一世紀の競争する日本人は、アジアの心の深層に帰りのつ、日本の心を若人と誇りあい、教えるべきだという。

教育の世界に万病に効く速効薬はない。せいせい、そういう願いは教師論に落ち着くことになる。したがって現在の歴史教育をめぐる問題点を一挙に解決し、学力向上の面に有効であり、教師の負担も重くしない学習方法はないと言えよう。

しかし、それだからといって手をこまねいているわけにもいきまい。ここで今一度、戦後の新教育に活気を与

昭和42年度名久井農高における稲葉プラン

日本史年間指導計画 (3単位 105時間) 地方史関係分				
予定時	単 元 名	県関係で特に注意する事柄	到達目標	所見・備考
オ 3 時	石器時代の生活と文化	庵ヶ岡土器と文化 夏川土器と文化 田舎籠土器と文化	考古学の宝庫青森県の研究史 縄文期の文化水準の高さと その停滞性、さらに弥生期 への発展を一等史料、遺跡 で理解	南係資料、文献も豊富で身 匠に遺跡もあるゆえ、興味 本位に走りないこと。 文化財保護精神を養うこと。
オ 23 時	平安末期の政治と文化	聚楽園問題について、坂上田 村麻呂以来の諸伝説、坪の 碑、有家御、重盛、義家、 義経などの伝説の民俗学的 研究	奈良時代以来の東北経営の 整理。東北史との関連の上 で考察。文化伝播の担い手、 ルートについて考える。ア 蝦夷の統治も明確にする。	地名の研究。 寺社霊場の 雨基説話の形成などを生徒 の身匠から集める。文献に ない歴史について正しい理 解態度を養成する。
オ 30 時	武家社会の展開	鎌倉幕府と南部氏 北条氏の独裁と時頼の回回 伝説 南北朝の動乱と南部氏	平泉滅亡の意味の理解 北条氏の得宗領国の失敗 南部氏の徳川支配の確立 南北朝の影響の理解	県下各地に豪族が抬頭して 来たこと。河川、溪を拠点 としていること。馬の機動 力の利用など動乱の背景を 掘り下げる。
オ 38 時	戦国時代の文化の伝播	南部と津軽	戦国大名の形成過程の理解 南部氏没落の原因の理解 下剋上と地方生産力の発達 津軽為信と近衛家一伝統の 力	古い郷土史的視角を分論 を離れる。土着大名の領国 支配の特異性
オ 54 時	社会の変動と 幕政の推移	津軽藩と南部藩(八戸)の 藩政改革	乳井貢と野村軍記の藩政改 革、 民衆の抵抗と支配層内部の 抗争の理解	後進地方の体制の動揺と 幕政並びに西南雄藩のそ れとの比較
オ 57 時	文化の成熟と 幕藩体制の動揺	文化の普及と安藤昌益	支那(陸運海運)の発達、 文化の伝播、 安藤昌益とその周辺について 封建制の矛盾を自覚した人 々としてとらえる。	法世物語などを紹介、その 弟子たちの活躍と当時の 八戸藩と社会を考える。 発見史も重要。
オ 78 時	日清・日露戦争と その時代	青森県とナヨナリズム	幕末の蝦夷出兵以来の対外 感覚、自由民権運動も養生 会も中国革命も一連の系譜 にあって陸奥前、本多庸一 らの巾広い理解をする。	北方警備の影響とオ八師団 設置を考える。
オ 88 時	経済不況と 戦時体制の進展	ファッショ体制と青森県	昭和初期の東北農村の悲惨 な生活、小作争議など無産 運動の激化、旧制弘高生の 左翼運動、八師団青年将校 の維新思想などを総合的に 把握理解させ、時代の動き と関連させる。	生徒の父兄など身近な環境 と歴史学習事項とのぬれ合 いを考えさせる。
オ 104 ・ 105 時	歴史と人間	県人で日本文化史上大きな 役割を果たしたり、国際的に 活躍した人物を理解する。	葛西善蔵、大宰治、石坂洋 次郎などの文学、地方主義 思想のグループ、棟方志功、 高木泰造のまるめろ、講談 社と県人、国際的には満洲 建国と工藤忠、柳引弓人と アメリカ移民、山田良政と	→中国革命、コンテコマ(前田光世)とスラジル移民、その他西有彦山や陸奥前、江戸秋葉の思想も紹介したい。

また問題解決学習と、それへの批判として意義づけられた系統学習について考えてみる必要がありはしまいか。そしてここで登場して来たのが主題学習なのである。

45年度高教研全国集會に参加した時、日本史教育の新しい動きとして主題学習が可能か、可能とせばその長所、短所は何かという問題提起がなされた。これは48年度より予定されている新教育課程上の問題であり、各県の実践報告にもそれに歩調をあわせてものがみられた。この点、青森県はやゝ問題意識が醒れていたと反省している。

すでに発表された中学校学習指導要で明確になつたように、新傾向は多分に国家意識を強調している。高校に關しても、狙いは高校社会科の中での日本史の特性、役割を明確にし、日本史を学習した結果、日本の子供を作りたいのだという主旨がのべられている。地域性、風土論が問題意識に登場してくるのはこれとの関係においてである。そして地方史はふたたび御土史と名を変えようとしている。こういう背景のもとに日本史の主題学習というものを多少論じてみたい。

主題学習とは元來「世界史B」の教科において扱われていた学習形態である。この学習形態が登場してきたのは、「昭和35年ころの歴史教育界の状況が、もっぱら大衆受用の羅列的、知的な歴史教育が横行し、歴史的思考力の養成、啓培に欠けていた。また世界的傾向として

「系統学習と問題解決学習をそれぞれの手技段階でどう統一していくか」が論じられ、高校教育段階では「系統学習を中心としつゝ、ひとつの問題を総合的に考えていく」場を作る必要があると考えられ、各国で、たとえばクリティカル、シンキング、メソッドとか範例方式による学習が考えられ、日本では主題学習が登場した。しかし、この方式は全国的には定着してないので、42年度の高教研全国集會世界史部会ではそのことを討議しあつたのである。

この学習でもっとも要求されている生徒の歴史的思考力とは何かについては、その時の講師、永井滋郎氏の実験研究として、「①、むかし、時代、年代、要するに時に關する意識 ②、歴史における事象相互の因果（直接の）の關係 ③、政治を社会、経済、文化などの諸側面からもみていく因果の關係（間接的）——これが主題学習に近と思う。④、時代構造の把握 ⑤、歴史の発達の理解 ⑥、歴史的な意味、意義の把握」としてのべられ、客観的な知識がどのようにして生徒の主體的な理解として、また問題意識として高まつていくかということが大加という。

要するに過剰教材の克服のために、系統的、年代的、総合的な従来の歴史教育に対して「本質的なもの」や「範例的な主題」についての向題史的な問いし問題解決的学習法をとり入れた、なお実験的段階にあるのが主題学習

を言めた新しい歴史教育法の現状である。文明史的にい
えば情報社会に適応しようという努力の一つである。

今年度の高教研全国集會日本史部會は、共通テーマと
して、「日本史の学習において、郷土の身近な資料を活
用する方として、歴史事象の具体的な理解を得させるた
めには、どのようにしたらよいか。」をあげたが、主題
学習を意識して組織活動をし、成果を収めたいくつかの
報告があった。たとえば東京都の「江戸の町」である。

都下22校の高校教師が運営委員となり、生徒の興味調査
を行ない、都立大の北島正元教授を助言者とし、町人の
生活に焦点をしぼり、「諸産業の発達、交通と都市」、
「商業と金融、町人の生活」、「幕政改革」などの授業
の中で導入部分、またはエピソードとして、さらには純
然たる主題学習も可能なようにまとめたものである。

その内容は単なる教材の史料操作でなく、歴史地理あ
り、民俗学あり、文化めぐりあり、文学、講談、浪曲、
視聴覚資料ありとまさにケンタンのものがある。この
いう豊かな再度からの歴史学習が行なわれるならば生徒
は最初の平田氏の報告にあるような感想をもちしはしな
かったろうし、三十年代初頭から盛んだった戦後の歴史
教育批判もおこらなかつただろう。しかし実際にはほと
んどこのように日本史学習は行なわれていないのであり、
私ごときは県代表として出席しながら、主題学習法の試
みすらしていなかつたのである。

もちろん一人の教師が、現在の学校体制の中で自らが
理想とする学習を直接的に行なうには色々困難があつ
ていう程簡単でない。東京都のメンバーをみ、学校をみ
て感ずるのは、かの有名な日比谷高校とか教育大附属高
校などの名が見えず、参考書を書いている先生方の名も
ない。私はそれらの学校、先生方の都内高校における立
塩を知っていたいから、そこに何かの意味を求めるのは
盲評のそしりを受けるかも知れないが、実は二十年代の
社会科華やかになりし頃、教育大附中の授業参観に行き、
何も新奇でない平凡な講義式であつたのにびっくりした
経験があり、それから向もなく社会科の改造が叫ばれ、
戦後のないろ／＼な試みが一掃され、講義式に大方の学
校がなつてしまつたという体験が私の中に強く刻みこま
れているから今回の主題学習の行方にも何か不安が感ぜ
られるのである。

しかし、現在の歴史教育はどうかしなればならぬとい
う局面に立たされていることも事実である。人間不
在が批判され、知識的偏向がいわれ、改めて構造的学習
とか戦前の国定教科書の情感が讃えられる、新中間層の
大量発生による教育思潮、社会風潮の変化の中で国家的
要請も公教育の場に強い。主題学習も時代の申し子であ
る以上、絶対的至上の価値を持つものではなからうが、
われ／＼高校教師が意欲的に取りこみ、現在行なわれて
いる各方面からの批判に積極的に応えるべきである。

高教研(全国大会)「日本中」部会の感想

昨秋、昭和43年度高等学校教育課程研究発表大会、社会「日本史」部会に参加する機会に恵まれて、一応全国の高校日本史教育における地方資料の取扱いのすう勢に融れることができた。とくに、これからの日本史学習を主題学習に組みかえていくほどの新傾向を知りて非常に有意義だった。

次に、その時の感想をのべて私の正史教育の反省とするとともに、諸兄姉の参考にしたい。

才一にこの教育課程研究大会の性格のしかりしむるせいか、地方史料の整備がそのままに教科書と同一化するまでに有利と思われる京都、並びにその周辺県からの発言が全くなく、総じて近畿地方からの発言は少なかつた。代表者の性格もあつただろうが奇異の感を受けた。

才に県教委の指導主事的な概括的発言と実際の現場的発言とが必ずしもうまく噛みあつていなかった。地方史研究発表大会でなく、昭和48年度から施行される教育課程改訂に關する集會の方だから、指導主事的発言が正統なのだろうが、自分自身で地方史の掘り下り、地方史料を使つての授業体験の少ない報告、発言は没個性的で、会場に与える感銘度や説得力は薄く、やはり現場で苦闘している教師の生の声の方が共感を呼んだ。

才三に学力向上とのからみ合いが、最終日の最後の時

向に話されたが、それはイコール大学進学との関連であつた。この問題が提出された時は既に閉会の四時に押し迫っていたし、群馬県あたりの指導主事の発言が予定されていたので突つて二人だ意見のかわしあいはなく、閉会後の三々五々の私話しあい、それく不満がのべられたのだが、実業高校や進学を主としないうち、さらには定時刻のことなど、考えるべきことの多い問題であつた。

才四に私が提案して遂に何等の話しあいがされなかつた評価の問題がある。地方史料を旨とするサシミのツマツに考えるのでなく、カリキュラムの中に体系づけて学習するのならば、やはり教科書の他の学習事項と同じく、評価の観点を独自に明確にしておかなければならないだろう。理解とか態度とか技能とかの評価の目やすをどのように設定するか、地方史料の教材化の困難性、特殊性があればある程にこのことは大事かと思うが、参加者の共鳴、必要性を呼ばなかつた。

才五に戦後、各地で、とくに小、中学校の教師たちがすぐれた郷土学習を行なつて発表をしているのだが、それらから学びとつて高技段階でうまく発展させているケースが殆ど見受けられなかつた。指導方法・学習内容は生徒の発展段階が違うのだから異なるのは当然だが、何人かの発表者の事例から推してみると継承が不充分と云つてよからう。

才六に地方史の意義を強調する時に中央史との係わりを調詞するのが普遍であり、中央文化の恩恵に浴するといふ言い方もあるが、そのことは観点によつては色々と同題がある。東北の歴史は蝦夷経営にせよ、明治維新にせよ、特にそうであろう。このことは歴史の発展や國家權力をどのように把握、認識するかということにかかわることだが、この発表大会では私の向題提起以外には誰も意識に上りせなかつた。奈良朝などの眞担体系はよく向題化されるが、いざわが郷土のことになると相成らず書種崇拜觀念が底にあつたのでは、地方史はいつまでも中央政治史の召し使いにすぎないだろう。この向題に講師の豊田先生が軽く触れて中央一辺倒にならないように注意されたが、地方史を取り扱う時にはいつも念頭に置くべきことではなからうか。

才七に史実に対して「なぜ」といふ向いかけがなされてない。教壇の歴史は確定の事実、客観的事実の歴史を教えるのであつて、仮定を考えるのは盛載的意味しかないと言われるかも知れないが、私産が今手許に残している史実はあらゆる可能性の中の一つの系列であり、残っていること自体偶然性によつたことが多いのである。従つて私産はその史実の起点に帰つてもっと「なぜ」といふ向いかけを史実に対して行つてよいと思つた。たとへば、愚向ともいふようが、芭蕉はなぜ、奥の細道といつても平泉までしかこなかつたのかといふことは、特に

北與羽の子供らには大切な向いかけではなからうか。元祿の北奥の天地は果して昭和元祿とアナロジーされるほど天下泰平であつたのか、交通事情は、文化水準は、芭蕉の弟子はいなかつたか、経済事情は、などと、それぞれ地方史と中央史とを結びつける好個の向いかけである。

私はこの大会に出席して、この他にも色々疑問に思つたり、大いに啓蒙されたりして来たが、多くの県で地方史料に学向の光りがあてられてなく、その解釈、使用に當つては、学界の有力な意見に従つとか、確認、承認されてからとか、専門家との協力体制が望まれるとか硬直であつた。勿論、公教育の枠内からは当然の配慮である。但し、地方的なものには地方の人間自らのときほぐす努力が必要かと思ふ。その選択権、可能性、限界は個人の能力だけでは危険であり、研究団体などの充分な歯止めが条件にならう。この会の発表でも江戸幕府の大改革に、安政の改革を加える必要ありと提案して高枝生には不適切といふ批判をうけた例があつた。

また地方資料で特に向題になるものに、民俗学的資料があつた。その他、地方の人物評価、授業時数の不足、進達の遅れ、授業方法、資料の教材化、管理、コース制、生徒の能力、現職教育、郷土の範圍と変質、学校予算、クラス活動との関連等々、二日の間には論じ切れぬ数多くの問題点が46都道府県から提出された。これらの向題は、各代表がそれぞれの地域に帰つてまた実践を踏まえて深めていくだろうが、とに留すしりと重みのある内容の研究大会であつた。